

タナティブの提示は議論を喚起する力に溢れており、本書が単なる解説書に終わらぬ所以であるが、同時に、そこに逆に著者の過剰解釈の弊が見出される傾向があるのも本書の小さからぬ瑕疵と言える。一例だけ挙げるならば、エヴァグリオスを知性主義から解放しようとするあまり、「アパテイアは愛を生む」(p. 159)と断定するのは、彼における修行論と観想論の關係に誤解をもたらしかねない。いずれにせよ、本書は未決の問いに駆動され続ける書として、我々読者がその問いを著者から引き受け、さらにオリゲネスとプロティノスとの関わりを引き込んだより大きな問いとして今後も問い続けるよう挑発し続けるに違いない。その意味で本書は、専門家にはもちろんのこと、専門外の方々にも是非とも読んでいただきたい(いささか大風呂敷な)啓発の書と言ってよいだろう。

Loris Sturlese

*Homo divinus: Philosophische Projekte in Deutschland zwischen
Meister Eckhart und Heinrich Seuse*

W. Kohlhammer GmbH Stuttgart, 2007, pp. XII + 263

加藤 希理子

本書は、マイスター・エックハルトを中心に、1250-1350年のドイツの思想的状況に光を当て、当時のドイツに固有の思想的潮流を明らかにすることを試みている。著者は、当時のドイツ思想界を牽引したのはドミニコ会であるとし、そのドミニコ会の中心地となったのがケルンであると位置づけている。著者は、当時ドイツで唯一の高等教育機関であったケルンのシュトゥディウム・ゲネラーレの注目度の高さに触れ、13・14世紀の指導的なドイツ人ドミニコ会神学者および哲学者はすべて、シュトゥディウム・ゲネラーレと関係していたと主張する。著者は、当時のドイツの思想界、とりわけドイツ・ドミニコ会が、アルベルトゥス解釈をめぐる二つに分裂していたことを指摘している。言うまでもなくアルベルトゥスは、広く西欧思想全体に多大な影響を及ぼし、アリストテレス注解者として、トマス思想の土台を構築したという点において重要視された。しかし、著

者は、こうした評価とは別に、アルベルトゥスがドイツ思想界、ドイツ・ドミニコ会にもたらした固有の「遺産」を継承する流れを対立的に抽出しようとする。それは、トマスとの結びつきという観点からアルベルトゥスを評価するのではなく、アルベルトゥスの思想がトマス主義による解釈と相容れないということを呈示し、しばしばトマスよりもアルベルトゥスの権威を強調する潮流とされる。著者はそれをドイツ思想界における「第二の哲学的潮流」と呼び、一般に「ドイツ神秘主義」と呼ばれる潮流と同一視している。この潮流に属する思想家によるアルベルトゥス解釈の大きな特徴の一つとして、著者は、アルベルトゥス思想の内の新プラトン主義やヘルメス主義といった異教の思惟への彼らの強い関心を挙げている。なかでも、プロクロスへの注目は、比類のないものであったという。著者は、アルベルトゥス解釈をめぐり、こうした潮流とトマス主義との間に激しい思想的対立が生じたと主張する。

アルベルトゥスの直接の弟子であったディートリッヒとエックハルトは、この流れにおける中心的な思想家として位置づけられている。著者は、知性論について、アルベルトゥス、ディートリッヒとエックハルトの思想史的ラインを浮き彫りにしていく。アルベルトゥスは、「知性は神的なものである」とし、知性に基いて人間は、神と似ているのであり、人間は、「神と世界をつなぐ輪である」と主張した。そして、ディートリッヒとエックハルトは、この思惟を共に——全く同じ仕方ではないにせよ——継承していったのだとされる。著者によれば、ディートリッヒは、アルベルトゥスの「神的なもの」という語を、アリストテレス、プロクロス、アウグスティヌスを受容しつつ「隠された知性（精神の秘所）」、「魂における像」と置き換え、人間知性は単に、トマスが主張するような感覚的知覚から普遍的概念を得る魂の能力ではなく、「すべての思惟されるものの一性」であることにおいて「神の似像」であるとしている。彼は、そうした人間知性が神の本質から発出したのであり、神を直視することにおいて実在するとみなしているという。著者は、ディートリッヒが、人間知性による神の直視について、それが人間の自然的状態によっては不可能であるとするトマスとの自覚的対立において展開しているとする。一方、著者によると、エックハルトは、知性の本質を「無制約的」、「無規定的」、「開放的」なものと捉え、そうした本質によって、知性は「神の像」であり、時間的・空間的に規定されず、「無限なるもの」を認識することができるとしている。エックハルトは、「子なる神」、「神の言葉」を

「神の像」と呼ぶが、その特徴は、「すべての知性的な像」に帰属するとし、「知性は、造られたものではなく、神の子である」と主張しているという。彼における「神の人間」という言葉も、こうした「知性の尊厳」から語られているのだとされる。著者は、これら三者においては、西欧キリスト教世界において数世紀來、支配的であった「人間的条件の悲惨」に代わる「人間の尊厳」を根拠づける論拠として、人間の知性を通しての「神の似姿性」が用いられていると主張する。

著者は、上記の潮流、すなわち「ドイツ神秘主義」とトマス主義の相違・対立との関連においてエックハルトに対する異端審問および異端宣告の背景を浮き彫りにしようとするとともに、異端宣告がドイツ・ドミニコ会においていかなる影響を及ぼし、いかなる反応を呼び起こしたのかをも考察する。具体的に著者は、エックハルトのテキストが、リンダウのマルクヴァルト、クヴェトリンブルクのヨルダン、モースブルクのベルトルドといった周辺の思想家たちによってどのように対峙されたかを提示し、異端宣告後、エックハルトの思想がドイツにおいてどのような仕方で受容されたかを示した。マルクヴァルトとヨルダンは、エックハルトの言葉を引用しながらも、「その形而上学および人間学的教説からは距離を取っている」という(114頁)。それに対して、異端宣告後もエックハルトを支持した「エックハルト主義者」たちがケルンを拠点に存在したことにも言及される。著者によれば、彼らは、独自の思想を立てることなく、エックハルトの著作、教説を広めることにすべてのエネルギーを注いだ一群で、著者は、エックハルトが異端の嫌疑をかけられた命題について弁明を試みた『弁明書』や彼の説教の収集、彼の著作の決定的な版である“CT-Rezension”の編纂・保存を、そうした一群に属する者の手によるのではないかと推測している。著者は、彼らを独自の思想を展開しなかったという点で、ベルトルドやタウラー、ゾイゼ——著者は、彼らもケルンと密接な関係があることを強調する——と区別している。

著者がエックハルトの思想的連関の観点から非常に重視しているのは、このベルトルドであると思われる。ベルトルドは、ディートリッヒの弟子であるが、エックハルトのテキストを引用してはおらず、いわば彼について「沈黙を貫いている」という。しかし、著者は、この「沈黙」をもって、エックハルトの彼に対する影響を否定することはできないと考えている。ベルトルドは、自身の思想において、ディートリッヒの教説に中心的な位置を付与することによって、「エックハルトが寄与した哲学的構想をさらに推し進めた」(113頁)のだという。ベル

トルドの主要な業績は、プロクロス注解であり、著者はその内に大きな意義を見出している。著者によれば、ベルトルドのプロクロスへの関心は、ディートリッヒによって引き起こされたもので、彼は、ディートリッヒの知性論を存分に活用し、プロクロス注解の中で、「すべての人間は、その自然的知性の習熟、すなわち哲学することを通して、神的人間となることができる」（148頁）という思惟を打ち出している。加えて、著者は、ベルトルドが、プロクロスの著作を「神の誕生」と「神の人間」というエックハルトの哲学的教説に接近するために相応しいものとみなしていたと指摘する（175頁）。著者によると、ベルトルドは、プロクロスの『神学綱要』を、宇宙の隠された構造を明らかにし、神化へと導く方途を開示する「哲学的啓示」であるとみなし、プロクロスの神学においては、神の人間によってのみ理解可能である「神的な知」が示されているとする。

さらに、著者は、ベルトルドとタウラーの関係の密接さについて論じ、両者が「盟友」関係にあったと位置づける。著者によると、彼らは共にディートリッヒとエックハルトの影響下にあり、トマス主義とは相いれない路線を進み、そして、ベルトルドによるプロクロス注解は、タウラーのプロクロス解釈の典拠となった。著者は、タウラーが彼らの影響の下、有名な「魂の根底」を構築していく過程を描きだしていく。タウラーは、「魂の根底」を「魂における神の像」とするが、その際、魂の本質と能力の統合というトマスのな像の論理を拒否し、両者を対立させ、「魂の根底」、「神の像」は、魂の能力ではなく、根源的・原理的・本質的な活動、形成的な原理を有するものと主張したのだとされる。

また、著者は、ゾイゼについても、その思想の中核を知性論から明らかにしようとして試みている。すなわち自身の思想の展開の中でエックハルト思想を擁護しようとしたゾイゼは、エックハルトの知性論・魂論を継承し、「知性の長い道の最終段階に、人間の再生があり」、この世における「知性的な生から、新しい、高貴な人間が誕生しうる」と主張したのだという。

以上、本書の骨子について概観してきたが、最後に本書の持つ意義について述べておきたい。まず重要なのは、著者が「ドイツ神秘主義」を学的・哲学的な運動であったと解釈している点であろう。著者は、エックハルトの他、従来、「思弁的ではない」というイメージで捉えられていたタウラーやゾイゼといった思想家も、あくまでも哲学者として捉えなければならず、彼らの「神秘的体験」に由来すると考えられた概念も、哲学的な論証によって把握されなければならないこ

とを強調する。さらに、本書の大きな意義として、これまで詳細に研究されてこなかったベルトルドを、ディートリッヒ、エックハルトを継承し、タウラーに多大な影響を与えた、いわばドイツの「第二の潮流」におけるキーパーソンとして光を当て、彼の思想史的な重要性を詳細に考察した点が挙げられよう。また、本書の根底には、著者による徹底した史料批判が存するが、これは、極めて秀逸なものである。特に、上記のエックハルトの『弁明書』の編纂過程の考察の他、ドイツ語説教の Corpus の復元、『三部作』の執筆時期の確定の試みは、特筆すべき学問的価値を有しており、今後のエックハルト研究に対して大きな貢献をするものと考えられる。